我が故郷サハリン

粕屋郡篠栗町　　栗原　和子

８月１５日、いつものように教習所へ行く、１時間目の授業の時、今日正午に重大放送があるとのこと、講堂に集合。その時は、雑音ばかりでさっぱり意味が分りませんでした。午後３時頃になってようやく日本の無条件降伏を知る。樺太はソ連に明け渡すことになった。女、子供は直ちに内地に引揚げなければならない。そして１５才以上の成人男子は、残留すること、残務整理のためとか教官が涙を流しながら伝えて下さった。各自教室に帰り、担任の教官から訓示があり、「我が国は敗戦国になったけれど、今にきっと大木のように大きくなって見せるという気持ちを決して忘れずに堪へるのだ」といって諭して下さった。当時私は、樺太鉄道局豊原教習所に入所していました。急いで寮に帰り、帰省の用意をする室中が、ごったがえしでした。その夜のおかずは鯖の煮付けでした。同室の友人に、蕁麻疹が背中、お腹、身体全体にできてかゆがるので、友人をつれて、あまり良く知らない落合の町の病院を探し回りました。

翌朝起きると、炊事のおばさんがもう引揚げた後でした。皆で白い御飯をたくさん炊いて、おにぎりを、たくさん作って分け合いました、お弁当にして。早く親元へ帰へりたい一心で、駅へと友人と走り、駆け込み、もう既にホームには北の方から長く続いた貨車に、女、子供ばかり乗ってました。途中各駅に停っては人を乗せてということを繰り返しながら、大泊港へと走っている。トイレがないので、子供がオシッコといって泣き叫ぶ。戸が開いたまま走りますので、鉄道員のはしくれの私と友人は、次から次へと子供を抱っこしては外へ向けて用を済ませました。

朝落合の町を発ってようやく、大泊町に着く。勤務先、楠渓町駅につく。駅長に挨拶をする。「よく帰って来た、早くお母さんの所に帰りなさい」といって、責任と安堵の色がお顔に現れていました。今だにあの時のこわばった駅長さんを忘れられません。母は、私の安否を気使かって何べんも駅に来ていたらしい。同僚の江戸君が、こっそり教えてくれた。

急いで家に帰る。町では帯剣をはづしたり、公用の腕章を付けたまま気の抜けたように茫然としていた兵隊さん達、本当にお気の毒な姿でした。海岸の方では、朝鮮の人達が鐘や太鼓で踊りまくっていました。その対照的な光景を後にして家に着く。母が出て来て、「和子が帰った、さあ揃った」といった。私より１０分位前に弟が、学生勤労動員で熊の出るような山奥に行ってました。松の木の伐採のためでした。１５才の弟は当然残らなければなりませんが、大人にも成り切ってない子供をどうして残して内地へ帰れるか、といって荷物の整理をしながら怒っていた母の姿が目に映ります。私も自分のアルバムの中からばりばりはいだり、衣類などリュックに入れたり、なにから手を付けてよいか分らない。港では両手に荷物を持つと、乗船する時にバランスを崩して海中に落ちたりするから、荷物はリュックだけと母はくどい程に叫んでいる。船は１７日夜１０時出航。それまでに港へ行かなければ。お隣りのおばさんがドン

ブリ一杯の馬鈴薯の蒸したのを持って来てくれた。「ドンブリはいらないよ」といって、アッというまに帰って行った。以後おばさんにお会いすることもなかった。

東京大空襲で、焼き出されて父の亡くなったのも知らずに、命からがら大泊に帰ってました。兄夫婦がおりましたので、母、兄嫁、弟、私と４人、兄に送られ港へと急ぎました。船が、岸壁を離れる時、いつまでも手を振っている兄の姿に向って、「定雄も一緒に内地に帰れたら」といって、母は兄嫁の肩に手をかけて泣いていました。

船室はもとよりマストの回り、甲板、女子供ばかり鈴なりになっていました。甲板にはドラム缶が敷き詰められ、その上にムシロをひいて私達は坐りました。また夜はとても寒くて身体を寄せ合いながら、ムシロもかぶりました。ピッチを上げて進む船にぴったり、イルカが目の前について来る。そのうちに北海道が見え、稚内港に入った時は涙が出て止まりませんでした。

１８日の朝です。屋根のない貨車が既に引込線に止っていたので、それに乗りこむ。宗谷本線、函館本線と替えて南へと上って行く。途中長いトンネルを潜った時はまるで、生地獄のようでした。煙が、トンネル中に一杯になり、咳やら悲鳴、子供の泣き叫ぶ声、私達大人でも苦しくて死ぬんじゃないかと４人で床に伏せました。本当にきつかった。旭川に着いてから普通の列車に乗り替えた時はホットしました。ホームでは、トーモロコシ、キュウリ、トマト、お茶など、皆さんが配って下さいました事、あの味、御親切を忘れてはおりません。父母の里、野田追の駅の着いたのは２０日夕方でした。

それから３ヶ月、母の実家でお世話になり、福岡に来ることになりました。理由は、兄、姉、弟などがおりましたので暖かい九州に来いという再度の便りで、母もあきらめて博多に来ることに決め、１１月６日、降りしきる雪の中、函館港に２晩泊まった。乗船の順番待ちでした。まず戦勝国占領軍、２番は中国人、３番は朝鮮人といった工合で、日本人は最後に乗るのです。本当に敗戦国の悲哀を感じ、涙が出て来るのをどうすることもできませんでした。北海道から九州まで、日本海側を南下しました。列車は相変らず満員で、ガラスはなし。壊れた窓からの出入はあたりまえ、トイレの中まで、あの狭い所に２、３人の男の方が乗っていました。本当に困りました。食料もだんだんなくなり、水代わりの梨も大阪に着く頃には無くなり、弟も何もいわなくなり可哀相でした。お隣の席のおじさんが、「九州まで大変だね」と言って、おにぎりやするめ、お菓子などを下さった。それで、どうやら博多まで、来ることができました。本当に有り難うございました。戦争は二度としてはなりませんね。こんな思いは私達の時代だけでたくさんです。平和に暮らしている今の人達には経験させたくない気持で一杯です。